

エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の〈場所〉」

大学の二つの身体

大久保 譲

王の「政治的身体」と「自然的身体」の二重性を精緻に分析してみせたカントーロヴィッチの名著に倣って、大学には二つの身体がある、と考えてみよう。教育や研究、学則やカリキュラムといった制度からなる「理念としての大学」と、それらが具体化する場としての、大学の建物。

言うまでもなく、研究・教育がどのような建物でおこなわれるか、というのは大学にとって決して副次的な問題ではない。大人数相手の講義を可能にするのは大教室をそなえた建物であり、少人数教育を徹底するなら、それにふさわしい小さな部屋が多数必要になる。1990年代以降、何らかの「改革」に関わってきた日本の大学関係者であれば、「理念」の闘争として始まった大学改革が、往々にして建築上の制約につきあたり、あるいはしばしば校舎の新築・改築という物理的な改変を伴うのを見てきたはずだ。新学部・新学科を開設する場合はもちろんのこと、既存のカリキュラムの再編においてさえ——「教室の確保」という“問題”を、どれだけ耳にすることか——建築的配慮は欠かせないのである。

にもかかわらず、大学の理念を語ることに熱心な巷間の「大学論」の多くは、大学のもう一つの身体であるその建築物に関して、奇妙な無関心を示している。

好意的にであれ批判的にであれ、いまだに言及される機会の多い大学論の古典、ジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学の理念』(1873)もまた、大学教育の理念を格調高く論じながら、その教育がどのような校舎で行われるべきかについては、何も語ろうとはしない。宗教教育の必須をいうための前提とはいえ、知識が何かに奉仕することを否定し、「知識のための

知識」の意義を主張した——「芸術のための芸術」を唱えたペイターやワイルドがニューマンを讃美したのも頷ける——ニューマンのエッセイを読んで、何より気になるのは、彼が描く大学が、まるでカリキュラムだけで成り立っているようで、具体的な教室や校舎のイメージがまったく欠けている点だ。よく知られているとおり、ニューマンの大学論はもともと、学長職を要請されたアイルランド・カトリック大学の新設を目指す演説（1852）に基づいている。实际的な目的を持つ議論なのだから、その具体的な場としての大学の建築物について触れていないのは、いっそう不思議なことに思えるのだ。

一方、実学・科学教育を重視し、ニューマンとはおよそ対極的な大学教育に関する理念を抱いていたT. H. ハックスリーも、教育の場としての建築にさしたる関心を示さないという点では、『わが生涯の弁明』の著者と径庭がない。なるほど、1876年、ジョンズ・ホプキンス大学の開校式に招かれておこなった「大学教育に関する演説」で、ハックスリーはある程度以上建築について語っている。だが、そこから読み取れるのは、結局のところ建築は大学の教育・研究において本質的な要素ではない、という主張である。

当分のあいだ建築をしないというのは、私にはもっとも賢明な決定のように思えます。教育のための巨額の基金が、すべてを石に変えてしまう建築という泉によって、単なるレンガやモルタルに使われて化石と化し、大学組織を運営するためのお金が残っていない、といった惨状を、これまでさんざん見てきました。……教育基金の管理人たちは、時に壮麗な宮殿を建てて、それを大学と称してきたのです。私は建築の門外漢ですが、あえてアドバイスをするなら、正直なレンガ職人を見つけ、増築のためのスペースはたっぷりとして、いま本当に必要な部屋だけを作らせなさい。一世紀後、ボルティモア・オハイオ鉄道の株価が1000ドル上がって、必要な教授陣をそろえ、必要な実験施設を建て、考えうるかぎり最高の博物館と図書館を作りあげて、それでもなお、どう使っていいかわからない数万ドルの金が余ったら、その時には建築家でも呼んで、ファサードを建てさせればいいでしょう。（Thomas Henry Huxley, “Address on University Education”, *Collected Essays*, Vol. III.）

大学の理念を語りながら、教育・研究の場となる大学の建物については全く触れないニューマンと、否定的な言及にとどまるハックスリー。この二人に限らず、大学の理念をめぐる戦わされた当時の議論のほとんどにおいて、大学建築への配慮は決定的に欠けている。

しかし誰もが知るとおり、ヴィクトリア時代のイギリスでは、大学改革の風潮に従って、少なからぬ大学の建物が新築されていた。それらの建物はしばしば、知識人たちの著作に劣らず「大学の理念」を体現している。ロンドン大学のギリシャ風の柱廊玄関は（ヴィクトリア時代以前の建築だが）、オックスフォード・ケンブリッジに抗した非キリスト教的な教育方針にふさわしいものだったろうし、オックスフォード大学の自然史博物館は、ゴシック建築の構造に剥き出しの鉄を用いて、新しい科学教育の登場を宣言している。そして鉄骨とコンクリートの構造にゴシック風の荘重な外観をまとわせた19世紀後半の市民大学＝赤レンガ大学の建物は、まるで「人文的教養」が「実学」的実体の装飾に使われているようにも見えるのだ。

理念としての大学ではない、ヴィクトリア時代の大学のもう一つの身体、すなわち建築としての大学は、大学論よりも、むしろフィクションの中で鮮明な像を浮かび上がらせている。

トマス・ハーディ『日陰者ジュード』の主人公は、誰よりも理念としての大学に憧れている（彼の愛読書にニューマンの著作が含まれているのは当然と言えよう）。だが、教育制度のアウタサイダーであるジュードにとって、大学は何よりもマテリアルな空間であり、「建物」としてその姿を現す。「来る日も来る日も、学寮のそばを通り過ぎる際、それらの回廊や中庭を彼は折にふれて歩き回るのだった。……いわゆるクライストミンスター『情緒』が、彼の体内にだんだん深く浸み込んできた。そして、とうとう、おそらく学寮の中に住んでいる誰よりも、それらの建物の材質や仕上がり具合や歴史などについて多くを知っているようになった」（川本静子訳、傍点引用者）。それゆえにジュードは、知識や財産や階級によって

ではなく、建造物によって「大学の理念」から遠ざけられていると感じる。「ジュードは、強く憧れた土地に現実に住むようになった今初めて、自分がその熱望の対象から実はいかに遠く離れているかを悟ったのだった。たった一重の壁が彼を、自分と共通の精神生活を分かち持つ幸せな同世代の青年たちから隔てているだけだった。……たった一重の壁——しかし、なんとという越え難い壁だろうか!」(同前)だからこそ、ジュードが学問を諦めるとき、白墨で捨て台詞を書きつけるのは、門の閉ざされたコレッジの塀なのである。

一方、ニューマンが初代学長を務めたカトリック大学の校舎——現在もユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンのニューマン・ハウスとして残っている——の様子を、同大学の卒業生であるアイルランドの作家は小説の中で次のように描く。

「十一時! もうあの講義にも間に合わない。いったい何曜日だったっけ?……木曜日か。十時から十一時がイギリス文学。十一時から十二時、フランス文学。十二時から一時、物理学。あのイギリス文学の講義を思い浮かべると、こんなに離れているのに、じれったくて、やりきれない気分になる。……[他の学生と違い]彼自身は頭もさげないで、あらぬことばかり考えているが、少人数の教室内を見まわしても、窓から隣接する公園の佻しい眺めに目をやっても、陰気な穴蔵のじめじめした腐朽の臭いばかりが鼻につく」(ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』大澤正佳訳)。スティーヴン・ディーダラスにとって、ニューマンの「大学の理念」は、あくまで現実の空間と時間の配置の中で具体化されるものだ。そして理念としては普遍的であるはずの「教養」も、例えば「イギリス文学」という形で、アイルランド人青年に対する文化的な圧力として機能する。

問題はむしろ、カリキュラムばかりではない。大学の校舎自体が、19世紀末アイルランドの宗教的・政治的力学の中に置かれているのだ。「階段をのぼってフランス文学の授業に出るには遅すぎる。彼はホールを抜けて左手の廊下を物理学の階段教室に向かった。廊下は暗くて静かだが、何となく気が許せない。……イエズス会の建物は治外法権だから、ここでのぼくは異邦人の間を歩いていることになるからだろうか? トーンやパーネルのアイルランドは空間的にもここから遠ざかってしまったような気がする」

(同前)。

あるいは、ヴィクトリア時代も終わり、赤レンガ大学が次々と認可を得ていた20世紀の初頭に、ケンブリッジ出身の一人の作家は、建物のない大学を想像してみせる。

「人間を集めて講義をするという野蛮な方法は、ずっと前になくなっていた。ヴァシュティも聴衆も自分の部屋から出ることはない。彼女は自分のアームチェアに坐ったまま講義し、聴衆も自分のアームチェアに坐ったまま、彼女の声をかなりよく聞き、彼女の姿をかなりよく見ることができた」(E. M. フォースター「機械が止まる」小池滋訳)。これはMOOCsの先駆けだろうか？けれども、同時代のウェルズなら嬉々として描きそうな光景を、フォースターはディストピアとして提示する。理念としての大学の終焉ではなく(未来世界でも学問・教育は続いている)、教室という空間の消滅が、人類の知性の終わりの予兆となっているのだ。

どこか単調になりがちな「大学の理念」をめぐる言説以上に、「大学の建物」について、ヴィクトリア朝文化研究者が考えるべきことは多い。

——専修大学准教授